

平成 26 年 11 月 6 日

第 24 回日本医療薬学会年会実施報告書

第 24 回日本医療薬学会年会

年会長 奥田 真弘

三重大学医学部附属病院 教授・薬剤部長

事業名 : 第 24 回日本医療薬学会年会

主催者名 : 一般社団法人日本医療薬学会

年会長 : 奥田 真弘 (三重大学医学部附属病院 教授・薬剤部長)

会 頭 : 佐々木 均 (長崎大学病院教授・薬剤部長)

後 援 : 一般社団法人日本病院薬剤師会、公益社団法人日本薬剤師会
三重県病院薬剤師会、愛知県病院薬剤師会、
岐阜県病院薬剤師会、静岡県病院薬剤師会、
一般社団法人三重県薬剤師会、一般社団法人愛知県薬剤師会、
日本薬科機器協会

実施日程 : 平成 26 年 9 月 27 日 (土) ~ 28 日 (日)

実施場所 : 名古屋国際会議場

〒456-0036 名古屋市熱田区熱田西町 1 番 1 号

会場数	口演会場	: 14
	ワークショップ会場	: 3 (薬科機器ワークショップ 1 含め)
	ポスター会場	: 5
	展示会場	: 5 (ロビー含め)

年会の趣旨

第24回日本医療薬学会年会を、平成26年9月27日(土)、28日(日)の2日間、名古屋国際会議場(名古屋市熱田区)で開催した。一般社団法人日本医療薬学会は、医薬品の適正使用を推進する立場から、現場の薬剤師が直面する様々な問題に関して研究発表等を通して情報交換を行い、医療薬学の進歩・普及を図り、最終的に社会へ還元することを目的としている。本学会は、薬剤師職能の進展とともに会員が年々増加し、昨年末には約9,500名を数えるなど薬剤師を主体とした学会として国内最大規模に成長している。また、薬剤師の専門領域は細分化される傾向にあるが、本学会は特定の領域に偏らず薬剤師のメインスペシャリティーからサブスペシャリティーまで幅広い領域をテーマとすることを特徴としている。本学会はこれまで、1) 社会貢献、2) 薬剤師力の育成、3) エビデンス構築、を軸として活動を展開してきた。

日本の医療は、少子高齢化や厳しい経済状況の中で、より高度で専門的な医療を安心・安全かつ効率よく提供するというジレンマに直面している。平成22年4月30日の厚労省医政局通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」では、患者の状況に的確に対応した医療提供のため多職種チーム医療が推奨され、中でも薬剤師の主体的な参画が極めて有益と強調された。本年会では、関係者が医療薬学の原点と将来を見据え、新展開を図る必要性から「新時代を拓く医療薬学フロンティア」をテーマとした。

「社会貢献」にかかるフロンティアとして、がん、感染制御、周術期、栄養、小児、精神科、腎臓病、免疫不全など、種々の疾患領域における薬物治療の向上や薬剤師の介入をテーマとしたシンポジウムを組んだ。また、チーム医療や地域医療の向上や、医療現場のニーズに適合した医薬品の開発・供給促進の観点から、医療現場と製薬企業の橋渡しをテーマとしたシンポジウムを、「薬剤師力育成」のフロンティアとして卒前教育から生涯教育までをテーマとした数々のシンポジウムを採用した。さらに、「エビデンス構築」のフロンティアでは、薬物療法の科学的基盤構築や薬剤師職能の評価をテーマとした種々のシンポジウムやセミナーに加え、研究成果の国際発信を目指して近日創刊予定の英文誌「Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences」をテーマとしたシンポジウムも企画した。

特別講演は「医療薬学の回顧と展望 ～医療現場とアカデミアの立場から～」乾 賢一先生(京都薬科大学)、「Leading the Pharmacy Enterprise to Ensure Continuity of Patient Care」Scott J Knoer 先生(Cleveland Clinic, OH, USA)、「がん免疫療法の新しい流れ」珠玖 洋 先生(三重大学医学系研究科)の各先生からカッチングエッジな話題を提供していただき、教育講演では、薬剤業務の科学的基盤となるレギュラトリーサイエンス、及び薬剤師育成の将来像となる薬学教育モデルコア・カリキュラムについて、平山佳伸先生(立命館大学)、及び太田 茂先生(広島大学大学院)、鈴木 匡先生(名古屋市立大学大学院)の各先生からご講演をいただいた。また、本年会では一般演題の中から優秀演題を選考することとし、演題応募時に選考を希望した演題の中から、厳正な選考を経て最終的に10題の演題を選出し、表彰を行った。

さらに本年会では、平成26年2月に制定された「日本医療薬学会利益相反マネジメント規程」に基づき、全ての発表において発表者に利益相反状態の開示を義務付けた。また、会員管理システムを利用した事前参加登録や携帯端末用のアプリを本格導入するなど、参加者の利便性向上に資する新たな取り組みにも力を入れた。

会費等の設定

参加費	会員	非会員	学生
事前参加登録	8,000 円	12,000 円	3,000 円
当日参加登録	12,000 円	15,000 円	4,000 円

懇親会	会員・非会員	学生
事前参加登録	8,000 円	4,000 円
当日参加登録	10,000 円	5,000 円

講演要旨集：3,000 円

市民公開講座：無料

共催ワークショップ（予約制）：無料

事業内容

1. メインテーマ 新時代を拓く医療薬学フロンティア
2. 年会長講演 1 題
3. 特別講演 3 題
4. 教育講演 3 題
5. 日本医療薬学会 学術貢献賞受賞講演 1 題
6. 日本医療薬学会 奨励賞受賞講演 3 題
7. 日本医療薬学会 Postdoctoral Award 受賞講演 4 題
8. シンポジウム 36 セッション
9. 教育セミナー 1 セッション
10. 薬物療法専門薬剤師認定制度委員会企画ワークショップ 1 セッション
11. 一般演題総数 1,590 題
 - 口演 275 題（うち優秀演題候補 50 題）
 - ポスター 1,315 題（うち International Poster 20 題）
12. 共催ワークショップ 1 セッション
13. 共催教育ワークショップ 1 セッション
14. スポンサーードシンポジウム 1 セッション
15. 共催セミナー 26 セッション
16. 日本薬科機器協会ワークショップ
17. 市民公開講座

参加者数 一般参加者数： 8,203 名
 招待者数： 78 名
 懇親会： 391 名
 市民公開講座： 約 90 名

一般参加者内訳参考資料

参加者内訳	正会員	非会員	学生	合計
事前登録	4,608 名	1,312 名	217 名	6,137 名
当日登録	827 名	1,102 名	115 名	2,044 名
海外		22 名		22 名
一般参加者計	5,435 名	2,436 名	332 名	8,203 名

運営組織

年 会 長	奥田 真弘	三重大学医学部附属病院 薬剤部
組 織 委 員	磯部総一郎	厚生労働大臣官房参事官
	伊藤 善規	岐阜大学医学部附属病院 薬剤部
	上山 誉晃	株式会社薬事新報社
	遠藤 秀治	岐阜県総合医療センター 薬剤センター
	大原 直樹	金城学院大学 薬学部
	大森 栄	信州大学医学部附属病院 薬剤部
	岡本 浩一	名城大学 薬学部
	勝野 眞吾	岐阜薬科大学
	勝見 章男	安城更生病院 薬剤・供給部門
	川上 純一	浜松医科大学医学部附属病院 薬剤部
	川西 正祐	鈴鹿医療科学大学大学院 薬学研究科
	河原 昌美	金沢市立病院 薬剤室
	木村 和哲	名古屋市立大学病院 薬剤部
	寺田 智祐	滋賀医科大学医学部附属病院 薬剤部
	西井 政彦	一般社団法人三重県薬剤師会
	野口 博司	静岡県立大学 薬学部
	樋 彰	愛知学院大学 薬学部
	平嶋 尚英	名古屋市立大学大学院 薬学研究科・薬学部
	政田 幹夫	福井大学医学部附属病院 薬剤部
	増田 直樹	三重県健康福祉部
	松浦 克彦	愛知医科大学病院 薬剤部
	松原 和夫	京都大学医学部附属病院 薬剤部
	村松 章伊	一般社団法人愛知県薬剤師会
	安原 真人	東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科
	山田 清文	名古屋大学医学部附属病院 薬剤部
	山田 成樹	藤田保健衛生大学病院 薬剤部
	山本 信夫	公益社団法人日本薬剤師会
	吉田 易範	独立行政法人医薬品医療機器総合機構 審査マネジメント部

実行委員	池村 健治	三重大学医学部附属病院 薬剤部
	石川 久高	桑名東医療センター 薬局
	岩本 卓也	三重大学医学部附属病院 薬剤部
	浦野 公彦	愛知学院大学 薬学部
	大井 一弥	鈴鹿医療科学大学 薬学部
	賀川 義之	静岡県立大学 薬学部・薬学研究院
	垣東 英史	鈴鹿医療科学大学 薬学部

川瀬 亮介	三重大学医学部附属病院 薬剂部
岸田 充弘	富田浜病院 薬剂科
北市 清幸	岐阜薬科大学
後藤 伸之	名城大学 薬学部
杉山 正	岐阜薬科大学
武内 恵子	白子クリニック 薬局
竹内 達	市立四日市病院 薬局
谷村 学	伊勢赤十字病院 薬剂部
内藤 隆文	浜松医科大学医学部附属病院 薬剂部
永井 拓	名古屋大学医学部附属病院 薬剂部
中村 敏明	福井大学医学部附属病院 薬剂部
鍋倉 智裕	愛知学院大学 薬学部
丹羽 隆	岐阜大学医学部附属病院 薬剂部
野田 晋司	三重大学医学部附属病院 薬剂部
堀 雄史	浜松医科大学医学部附属病院 薬剂部
松浦 恵子	一般社団法人三重県薬剂師会
松田 浩明	四日市羽津医療センター 薬剂科
松永 民秀	名古屋市立大学大学院 薬学研究科
水谷 秀樹	金城学院大学 薬学部
三宅 嘉昭	遠山病院 薬局
三輪 高市	鈴鹿医療科学大学 薬学部
村木 優一	三重大学医学部附属病院 薬剂部
森 正秀	津生協病院 薬局
森川 琢也	三重大学医学部附属病院 薬剂部
森田 真也	滋賀医科大学医学部附属病院 薬剂部
八重 徹司	鈴鹿医療科学大学 薬学部
矢下 里美	三重県立こころの医療センター 診療技術部 薬剂室
山本 雅人	名古屋大学医学部附属病院 薬剂部
吉川 香	岡波総合病院 薬剂部
渡邊 和久	一般社団法人三重県薬剂師会

事業成果

年会の開催に先立ち、平成 26 年 9 月 13 日（土）14：00－16：00 ホテルグリーンパーク津にて市民公開講座を開催した（参加者約 90 名）。テーマは、「インフルエンザにかからない、インフルエンザをひろげない知識とスキルを身につけよう」であり、医師、薬剤師、看護師の立場からインフルエンザの病気について、予防について、効果的な手洗いの方法、インフルエンザにかかってしまったからの対応、吸入薬の使い方等の講演を行い、参加者からの積極的な質問に対して応答を行った。いずれの質問も講演内容を理解したうえでのものであり、参加者の熱心な姿勢がうかがえた。一般市民に対して、日本医療薬学会および薬剤師の職能をアピールできたと考える。

平成 26 年 9 月 27 日（土）、28 日（日）の 2 日間、名古屋国際会議場（名古屋市熱田区）にて開催した第 24 回日本医療薬学会年会は、有料参加者数が 8,203 名あり年会史上、最大規模となった。また、年会前日の平成 26 年 9 月 26 日（金）には、日本病院薬剤師会主催の平成 26 年度学術フォーラム／病院薬局協議会を同会場にて開催した。

本年会は、メインテーマを「新時代を拓く医療薬学フロンティア」とした。特別講演 1 は京都薬科大学学長の乾 賢一先生より「医療薬学の回顧と展望 ～医療現場とアカデミアの立場から～」と題しご講演いただいた。医学が、基礎医学と臨床医学を両輪として発展してきたように、薬学もまた基礎薬学と医療薬学が並び立って切磋琢磨しながら前進する必要があると、Science（科学）、Art（技術）、Humanity（人間性）のバランスのとれた教育の実践は、質の高い薬剤師の養成だけではなく、研究能力を持った薬剤師（Pharmacist-Scientist）の育成や薬学研究の画期的な発展にも繋がるという強いメッセージをいただいた。特別講演 2 では、米国 Cleveland Clinic, Chief Pharmacy Officer の Scott J Knoer 先生より、” Leading the Pharmacy Enterprise to Ensure Continuity of Patient Care” と題しご講演をいただいた。米国における卒後の研修システム、専門性のある薬剤師の育成等に係わるレジデント制度は、この 10 年で飛躍的に充実してきており、医療薬学を支える人材育成の重要性について改めて考えさせられる良い機会となった。特別講演 3 では、三重大学大学院教授の珠玖 洋先生より、「がん免疫療法の新しい流れ」と題し、講演いただいた。今年、本邦で世界に先駆けて発売された PD-1 阻害薬等の抗免疫チェックポイント抗体、そして遺伝子改変 T 細胞の輸注療法といった新しいアプローチのがん免疫療法の臨床試験の結果が報告され、がん治療の先端が感じられる内容であった。教育講演では、薬剤業務の科学的基盤となるレギュラトリーサイエンス、及び薬剤師育成の将来像となる薬学教育モデルコア・カリキュラムについて、それぞれの第一人者である 平山 佳伸先生（立命館大学教授）、及び太田 茂先生（広島大学大学院教授）、鈴木 匡先生（名古屋市立大学大学院教授）の各先生からご講演を頂き、薬学教育の方向性、薬物治療の安全実施に向けたレギュラトリーサイエンスの重要性を学ぶ良い機会となった。特別講演の 3 演題、教育講演ともに、本年会のテーマに相応しく、薬剤師が医療の中で、今、何を求められているか、今後さらに必要とされる資質についての示唆に富んだ、貴重な講演であった。

シンポジウムに関しては、広く会員から企画を募集したところ、例年をはるかに上回る多数のご提案をいただき、実行委員会では 36 題を選出した。いずれのシンポジウムも大変盛況であり、中でもシンポジウム 4「周術期医療における薬学的管理と薬剤師業務」、シンポジウム 9「薬剤師の力で腎機能低下の防止に貢献しよう」、シンポジウム 18「注射剤業務を医療安全から考える－TPN療法、感染症、抗がん剤調製における薬剤師の貢献－」、シンポジウム 28「質の高い支持療法をマネジメントするために、薬剤師が行うべきこと」については、

会場内、会場前廊下に設置したモニター前、中庭に設置した中継モニター会場を合わせ 500 名以上の参加者があり、「薬剤師が主体的に行動することで医療を変えることができる」といった内容を討議するセッションが人気を集めていた。また、一般演題の申し込み数も 1,590 題にのぼり過去最大となった。口頭発表は 275 題（優秀演題候補 50 題を含む）、ポスター発表は 1,315 題（International Poster 20 題を含む）であり、ポスターについては午前午後の貼り替えを行った。優秀演題の選考については、口頭演題の申込時に選考希望のあった 142 演題について年会実行委員によるオンライン査読を行い、50 演題を選出した。当日の二次選考では、研究テーマ（新規性、インパクト）、研究内容（方法、データの質・量、考察）、発表・説明のわかりやすさ（発表態度、スライド）、質疑応答の 4 項目について選考委員 20 名による評価を行い、10 演題を優秀演題として選出し、翌日の社員総会後に表彰した。選考に当たられた委員の先生方には多大な労力を頂いたが、予定時間内に優秀演題に相応しい 10 演題を選出することができた。

今回の学会では、参加者多数のため、会場の混雑や利便性の低下が懸念されたが、会場外へのモニターの設置、中庭への中継モニターの設置を行うことで、多少の混雑の緩和に繋がり評価を得た。また、本学会年会で初めて本格導入した携帯端末用のアプリは、ダウンロード数 4,682 件（重複有り）を数え、スケジュール管理や検索機能、会場の位置案内等、参加者の利便性向上に寄与したものと推察される。利益相反状態を開示についても、開示準備がなかった演題は、講演・口頭発表（28 件、5.4%）、ポスター発表（107 件、8.3%）とも比較的少なく、当日に修正を依頼した結果、全演題で開示を行っていただけた。

このように、参加者数、演題数は過去の記録を塗り替え、さらに、アプリの導入、ポスターの午前午後の貼り替え、利益相反の開示、優秀演題賞の選出、会員管理システムと連動する事前参加登録システムの導入等の新たな試みを実施したが、大きなトラブル無く、本年度の参加者には、週末の 2 日間に医療薬学の現状と方向性並びに課題を効率よくかつ的確に感じてもらえたものと確信している。盛会のうちに終えることができ、関係者のご協力に心から感謝する次第である。